

光がさしてるここを知ってる

手を、手をひいてくれて、あたしはなんにも考えなくて好よかった。あたしばかりから労つかれてて歩くあるのもいやななってそれなのにあんたは、あんたもばかだからばかみたいな笑顔でなんにもためらわずに。あたしの手をとってあたしもしらずに立たち上あがつてた。

ここは森みたいだって云いったのはあんた。そうだよだからにげられっこない嘆なげいたのはあたし。だって足は跣はだし足で守るもんもなくってどうやってここからにげ出せばいいの。あんたは履くつだからぶじなのになにに何で履くつぬいでんの。「君も跣はだし足」それはそうだけどそうじゃなくってなんでぬいでんのって話でああもう履くつなげちゃった。あっち小おがわ河で深ふかかいからもう流れていっちゃったよきつと。つ

てゆうかそういうことならあたしにはかせてくれても良かったんじゃないかって思うのはあたしだけ？

あたしはあんたは走ってにげて徑みちには猛獣も出て畏おそもしかけてあつて命はからがら足はくたくたでも委くわいことは秘密にしよう。あたしとあんたの逃走劇。それは立派じゃなくて寧汗むしろだけで泥臭い話だしだれかにこのまねなかったらちよつとつらい。でもあたしを助けてくれたのはあんた。荒い息でも何度かころんでもあんたもあたしもみつともないどろだらけの顔でもあんたのその顔をあたしの宝物にしてもかまわないでしょ？ どうせあたしの記憶に焚やき付ついて離はなれれないんだしそれはもう同じことだとあたしはおもってる。勝手だよ。だからあたしはまだこの森から出られないのかもしれない。

あたしがあんたにさよならをいったのがいつだったかあたしはおぼえてない。そりやそうだよ。あたしがあんたにいわれたんだも

んね。あんたははしってつないでずっと絶対に絶対にはなすまいと思ってた手はいつの間にかちぎれてた。それであんたのさよならを云う時の悲しそうな顔ったら無かった。でも平気だよ。ここはあんたが連出つれだしてくれたあの暗い暗いところもずっと日がさしてる。狼ともなかよくなれそう。小河おがわだって飛んでいけそう。くまもリスも鳥もむしも笑わらいかたを教えてくれたのはあんた。感謝してるよ。あたしはひねててつたわらないかもしれないけどいつかあんたに伝つたえにいくよ。

光を一身に承うけて。

さよならとありがとうと照れ臭い光とあい。